

斎藤茂吉

1882年（明治15）～1953年（昭和28）歌人、精神科医。山形県生まれ。

本名は茂吉、または茂吉、号は童馬山房主人、伊藤左千夫門下、アララギの中心人物。生涯に17冊の歌集を発表、詠んだ歌は約一万八千首に及ぶが、本人は、「歌は業余のすさび」と言つてゐる。歌以外に『柿本人麿』全5巻など、多くの隨筆や研究書、歌論、医学の研究論文などを残した。戦争中は、積極的に戦争に協力した。

1882年（明治15）0歳、5月14日、守谷伝右衛門熊次郎の三男として、山形県上山市金瓶の農家に生まれた。母は「いく」。家は村一番の上層農家であつた。

1888年（明治21）6歳、4月、金瓶尋常小学校入学。
1890年（明治23）4月、堀田村半郷尋常高等小学校に移る。

7月、ゴッホ自殺。

1891年（明治24）9歳、1月、妹「なを」生まれる。

この頃より宝泉寺住職佐原蘆応に習字・漢文を、義父紀一の父、斎藤三郎右衛門に鳳絵を習つた。

この頃から茂吉は、絵、書、作文に才能を發揮。「成績が良く神童視された、特に習字がうまく、食事中でも人と話してゐる間でも、

いつも指でしきりに空に文字を書いてゐた」と弟はいう。



茂吉の郷里、初夏の上山市金瓶



隣家で菩提寺の宝泉寺



佐原蘆応

生母守谷いく
体格がよかつた。実父守谷熊次郎と
10歳頃の茂吉

冬の上山市金瓶

こうだいろはん
幸田露伴 (1867～1947)

茂吉は15歳頃、幸田露伴の『ひげ男』の付録の「靄護精舎雜筆」に感銘。その後、露伴文学に傾倒し、露伴の処世訓を指標として少年時代を送った。露伴文学は茂吉の人格形成に大きな影響をもたらした。

1898年（明治31）16歳、幸田露伴の影響大。佐々木信綱編『歌の菜』を読む。この頃から歌を詠む。
1900年（明治33）18歳、11月、養父斎藤紀一、ドイツ留学に出発。
1901年（明治34）19歳、3月、開成中学校卒業。6月、紀一長男西洋誕生。

1894年（明治27）12歳、
7月、日清戦争勃発
1896年（明治29）14歳、4月、高等科を首席で卒業。
8月、父と上京し、浅草の斎藤方に寄寓した。
9月、東京府開成尋常中学校に編入学。

ひょろひょろした腺病質の少年だった。
15歳まで夜尿症が続いた。

神経質で過敏症の体質の少年茂吉は、
この頃、中林梧竹の書「イロハ帖」を臨写。

1892年（明治25）10歳、4月、小学校卒業、高等科に進級。

9月、上山尋常高等小学校高等科に転校。

茂吉は15歳頃、幸田露伴の『ひげ男』の付録の「靄護精舎雜筆」に感銘。その後、露伴文学に傾倒し、露伴の処世訓を指標として少年時代を送った。露伴文学は茂吉の人格形成に大きな影響をもたらした。



伊藤左千夫（1864～1913・大正2）満48歳、脳溢血で死去。

明治33年、37歳の時、年下の正岡子規に師事。子規没後、根岸短歌会の歌人らをまとめ、偉人として敬愛する正岡子規の精神を継承した。

門下に島木赤彦、斎藤茂吉、古泉千櫻、中村憲吉、土屋文明らがいる。

「アララギ」誌上で赤彦、茂吉らと激しく対立した。



『馬酔木』(第3巻)
茂吉の歌がはじめに掲載された号。

1906年(明治39) 24歳、**1月、左千夫「ホトトギス」に「野菊の墓」発表。**

2月、茂吉の歌

「馬酔木」に掲載される。

3月、伊藤左千夫に入門、「馬酔木」の一員となる。



明治43年頃、結婚前の斎藤輝子、16歳頃



養父、斎藤紀一
精神科医・帝国議会議員

「口先がうまく、成り上がり者で貴族趣味の俗物」と北杜夫(茂吉の次男)は評している。『楡家の人のびと』の主人公のモデル。



一高卒業写真(明治38年5月)

前から2列目の左から2人目が夏目漱石、3列目の白い服が茂吉。漱石は、明治36年から一高の英語講師となっていた。茂吉は一高で漱石に英語を教わった。

明治36年5月22日、漱石の教え子の藤村操が華厳の滝に投身自殺した。漱石は自分の責任を感じ悩んだようだが、茂吉は「死せば其迄の事なり、後は空々寂々土と化するのみ」

「世は、無常迅速とかいへば未來は何だか分り申さず小生は今日では現金主義に候」などと旧友の吉田幸助に書き送っている。

茂吉は、この頃は、実世間的な功利主義、科学主義的な生き方を良しとし、藤村操の死を認めていない。「戦はずん



1905年(明治38) 23歳、**5月、一高卒業、7月、斎藤紀一の次女、輝子(11歳)の婿養子として入籍。**

9月、東京帝国大学医科大学に入学。

1月、夏目漱石「吾輩は猫である」発表。



正岡子規遺稿第一篇
『竹の里歌』(明治37年11月)

これを読んだ茂吉は、本格的に作歌を志した。(茂吉の文学的出発となつた書)

「竹の里歌よみて只一人樂しみ居り候・・・小生ははじめて竹の里歌をよみ驚き申候、以来子規居士の慕はしき一つ小生堪まざるが弟子にまでおなもひ居りし」と親友の渡辺幸造へ手紙を書いていた。(明治38年4月30日付)

子規の影響は茂吉を写生道へと導いた。



正岡子規(1867～1902)

1902年(明治35) 20歳、一高第三部入学。**9月19日、正岡子規没**

1903年(明治36) 21歳、**1月、養父の斎藤紀一ドイツより帰国、神田和泉町に帝国脳病院を設立、8月更に**

赤坂区青山に青山脳病院を創設した。**6月、短歌雑誌『馬酔木』創刊。**赤坂区青山に青山脳病院を創設した。**6月、短歌雑誌『馬酔木』創刊。**これを読み、作歌に志す。

日露戦争勃発



佐佐木信綱編『歌の葉』
明治25年4月、博文館
この本が、西行や源実朝に茂吉の目を開かせた。



1872年(明治5)

～1963年(昭和38) 歌人

三重県鈴鹿市生まれ。

新体詩集『この花』刊行。歌誌『心の花』発行。

短歌結社「竹柏会」を主宰。



青山脳病院(帝国脳病院)前面 敷地4500坪

1907年（明治40）

25歳、

3月、森鷗外、自宅で観潮樓歌会を主催。



森鷗外(1862~1922・大正11)
満60歳没

モウガイ

カントウルウ

カントウルウ

鷗外は、「新抒情詩」「国風新興」を意図し、『アララギ』と『明星』を接近させたため、新詩社の代表と謝野鉄幹とアララギと第木信綱の代表として佐々木信綱を招き、観潮樓歌会を開いた。これは26回開催された。参加者は、鷗外、左千夫、鉄幹、佐々木信綱、平野万里、与謝野晶子、吉井勇、北原白秋、石川啄木、長塚節、上田敏、木下奎太郎、平出修、古泉千櫻らである。

茂吉は明治42年の1月、

2月、4月の3回出席して

いる。

茂吉は、北原白秋や木下奎太郎から大きな影響を受けた。

1908年（明治41）26歳、1月、『馬酔木』終刊。

2月、三井甲之編集『アカネ』創刊。
10月、蕨真『阿羅々木』創刊。

根岸派は二つに分裂した。

12月、「パンの会」結成される。

1909年（明治42）27歳、1月、『セザンヌの油絵』はじめて紹介される。

9月、『阿羅々木』は『アララギ』と仮名書きとなり、東京の左千夫宅に発行所を移し、古泉千櫻、茂吉らが

順番で編集することになった。



『アララギ』

1910年（明治43）28歳、東京帝国大学医学部卒業

1911年（明治44）29歳、東大医科大学医学科卒業

1912年（明治45／大正元年）30歳、東大医科大学助手となる。勤務。「いのちのあらはれ」（短歌小言）、10月、辛亥革命勃發（民主主義革命）この年から大正3年まで『アララギ』の編集担当。島木赤彦を知る。

1913年（大正2）31歳、4月、連作「おひろ」を『アララギ』に発表。

5月、母いく、脳溢血で亡くなる。（享年58歳）



『赤光』表紙
明治38年から大正2年8月までの歌834首を収めている

ひた走るわが道暗ししんしんと堪へかねたるわが道くらし
9月、連作「死にたまふ母」を『アララギ』に発表。

10月、処女歌集『赤光』刊行、文壇内外に大反響起り、一躍有名になる。

1914年（大正3）32歳、4月、輝子（19歳）と結婚。7月28日、第一次世界大戦勃發

1915年（大正4）33歳、2月、長塚節没（満35歳）11月、祖母ひで没。

1916年（大正5）34歳、長男茂太誕生。12月、漱石没。

1917年（大正6）35歳、12月、長崎大学医学部精神病科教授となる。県立長崎病院精神病科部長も兼任。ロシア革命

1918年（大正7）36歳、第一次世界大戦終結スペインかぜ流行

1919年（大正8）37歳、歌論集『童馬漫語』刊行

5月、長崎に来た芥川龍之介、菊池寛と知り合う。



大正6年、輝子（22歳）茂太（2歳）茂吉（35歳）



『白樺』創刊号



『阿羅々木』創刊号

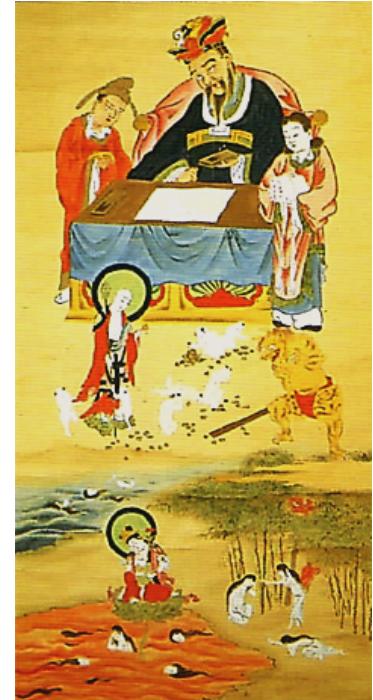


『アカネ』創刊号

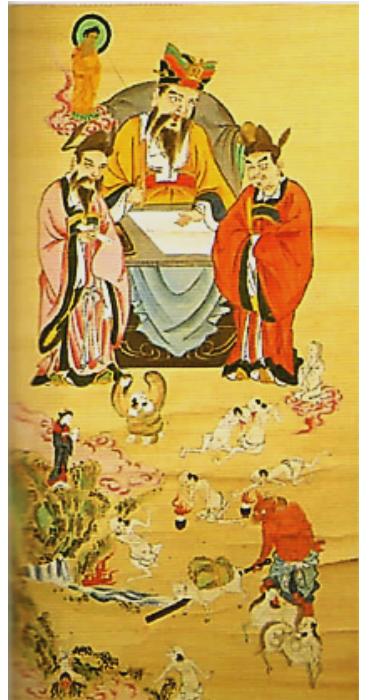
赤き池にひとりぼっちの真裸のをんな亡者の泣きぬるといふ

まはだか

もつじや



宝泉寺の「地獄極楽図」



宝泉寺の「地獄極楽図」

にんげんは牛馬となり岩負ひて牛頭馬頭どもの追ひ行くところ

茂吉

にんげんは牛馬となり岩負ひて牛頭馬頭どもの追ひ行くところ

茂吉筆・短冊

灰のなかに母をひろへり朝日子ののぼるがなかに母をひろへり 茂吉
「火のあくにはさひあへり朝日子の
のぼるかあかにはさひあへり朝馬ち

茂吉筆・短冊

のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にいて足乳根の母は死にたまふ

茂吉筆・歌碑



茂吉筆「歌碑」
宝泉寺裏の茂吉の母を焼いた火葬跡に建つ歌碑



茂吉筆「歌碑」
宝泉寺裏の茂吉の母を焼いた火葬跡に建つ歌碑(2歳) 茂吉(35歳)

1920年(大正9) 38歳、1月、スペインかぜに罹る。「短歌における写生の説」を「アララギ」に連載。
1921年(大正10) 39歳、1月、第二歌集『あらたま』刊行。

歌集『つゆじも』
昭和21年8月刊行。
長崎時代(大正6年12月~大正10年3月まで)の歌を中心に収めた歌集。

長崎時代は歌論、とくに写生論を多く発表している。それらがまとめられて、大正9年4月号の「アララギ」に「短歌に於ける写生の説(一)」が発表され、「実相観入」という写生論がうちたてられた。

あはれあはれここ
は肥前の長崎か唐
寺の蓋にふる寒き
雨

朝あけて船より鳴
れる太笛のこだま
はながし並みよろ
ふ山

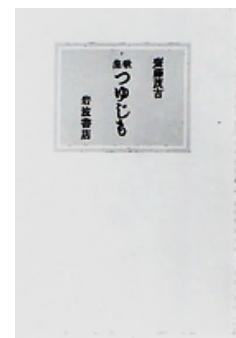
上の歌は、「赤光」に収められた11首の「地獄極楽図」の連作の一部である。茂吉の故郷の宝泉寺で子供の頃に見た「地獄極楽図」(正確には「十王図」と「来迎図」)の掛け図を思い出して、明治39年に詠んだものである。

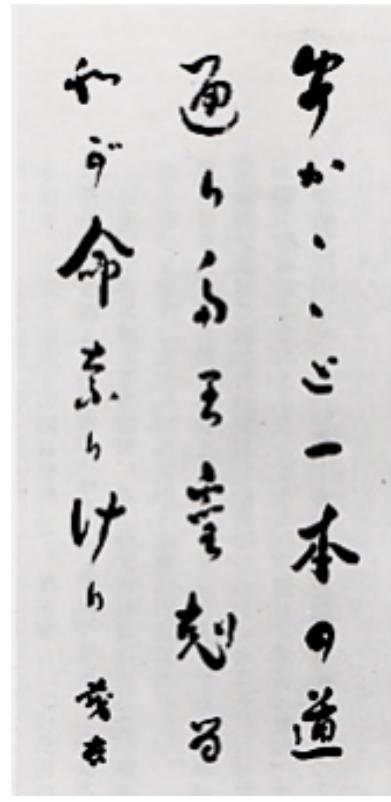
子規が、釈迦の「涅槃図」を見て作った「木のもとに臥せる仏をうちかこみ象蛇どもの泣き居るところ」の如き「古今になき姿」を「小生もマネいたしたる次第に候」と、友人の渡辺幸造への手紙で子規の模倣をしたこと告白している。しかし、これは単なる模倣ではなく、子規の歌に触発されて、茂吉は絵画の芸術的再現を通じて、亡き母や薩摩和尚の居る、故郷へのおもいを表現したのだと想われる。

歌集『赤光』の名称は、浄土真宗の根本經典の一つ『仏説阿弥陀經』の中の「池中蓮華、大如車輪、青色青光、黃色黃光、赤色赤光、白色白光、微妙香潔」によっているという。茂吉は赤色が好きであった。連作10番目の歌

「白き華しろくかがやき赤き華赤き光りを放ち

ゐるところ」もこの経典によっている。





茂吉書『あらたま』卷頭6「一本道」の第1首



茂吉筆 松山市の宝厳寺にある「一本道」の歌碑

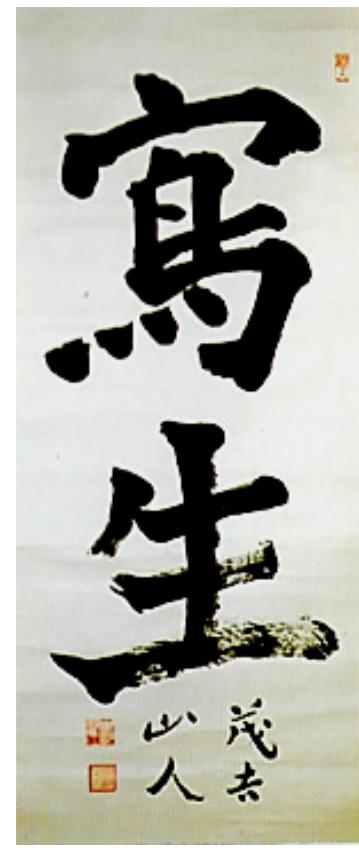
芥川龍之介は、この歌をゴッホの絵のようだと讃嘆した。



『あらたま』表紙
大正2年9月から
大正6年12月までの作品 746首



茂吉筆「寫生道」

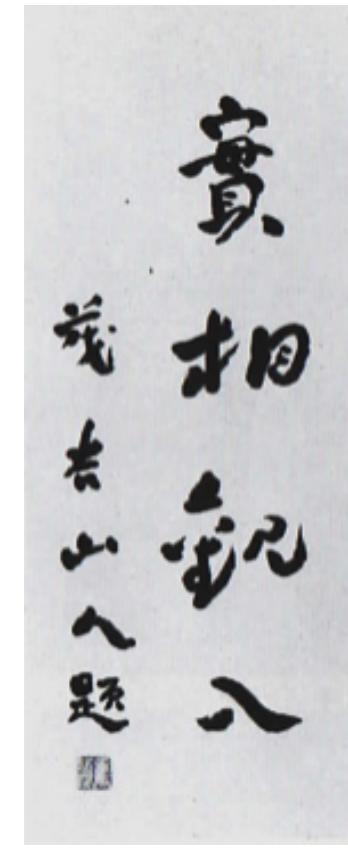


茂吉筆「寫生」昭和6年(1931)

「寫生」は手段、方法、過程ではなくて総和であり全体である。「寫生」の究極は「生」の象徴となる。

「寫生」とは、「生を写す」の義、「生命直射」の義、「生」とは「いのち」の義、「写」とは「表現」の義である。

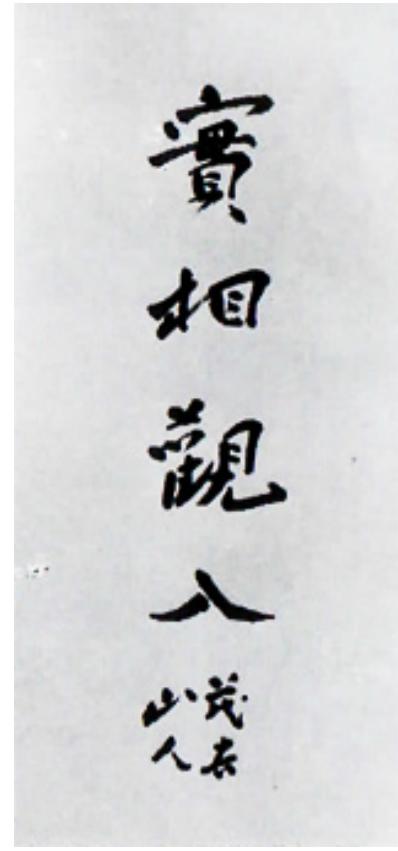
短歌に於て主観的とか客観的とかいふことを気にせぬがよい。新しき実在、新しき実相に観入するとき、その短歌の声調もおづからそれに伴ふのが順序である。



茂吉筆「實相觀入・茂吉山人題」

自然を写生するのは、即ち自己の生を写すのである。

「實相觀入」は、茂吉が唱えた短歌の写生論で、子規の写生論を発展させた歌論。これは、長崎時代、スペインかぜに罹り、肺炎を併発、喀血したが、肺炎から回復後の病中、病後にまとめられた。



茂吉筆「實相觀入・茂吉山人」

茂吉独自の「寫生説」(片野達郎氏によるまとめを参考に)

「實相觀入」は、茂吉が唱えた短歌の写生論で、子規の写生論を発展させた歌論。これは、長崎時代、スペインかぜに罹り、肺炎を併発、喀血したが、肺炎から回復後の病中、病後にまとめられた。



茂吉のメモ



ファン・ゴッホ筆「ひまわり」1888年
ロンドン・ナショナルギャラリー蔵



ファン・ゴッホ筆「種まく人」1888年 64×80.5 cm
オッテルローのクレラー・ミュラー美術館蔵

ミレーの「種まく人」のポーズを借りた絵、ゴッホにとって、色彩は自己の内面を表すものであった。

12月13日、マルセーユ着、12月20日、ベルリン到着。茂吉は、留学中、医学の真摯な研究生活のあいまに、ヨーロッパ各地を旅し、寺院や美術館や病院などを見学し、視覚的、感覺的に西洋文化を摂取しようと努力した。そして、帰国後、『接吻』『ドナウ源流行』など、すぐれた滞欧隨筆や『遠遊』『遍歴』などの歌集を残した。

茂吉は、西洋近代絵画の影響を複製の図版から受けた。茂吉と同じく、画家になりたかった芥川龍之介も、西洋文化の、言葉による理解に限界を感じ、絵画などの造形藝術によつて感覚的に西洋を理解しようと考えていた。

芥川は『あらたま』の「一本道」「遊光」連作を「ゴッホの本質」を深處においてとらえ文芸化した作として絶賛した。

あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり
かがやけるひとすぢの道遙けくてかうかうと風は吹きゆきにけり
野のなかにかがやきて一本の道は見ゆここに命をおとしかねつも
あかあかと南瓜ころがりふたりけりむかうの道を農夫はかへる
あかあかと土に埋まる大日のなかにひと見ゆ鍬をかつぎて

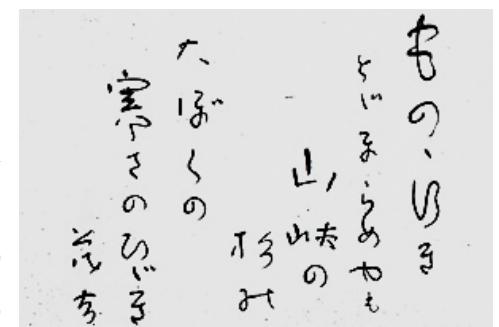
「ひまわり」のメモでは、絵をスケッチして、12輪のひまわりそれぞれに番号を打つて、その一輪一輪の描法についてメモをしている。メモは2300字以上に上る。その一部を見てみよう。

(2) 心ハ黄緑ノ色デカイテアル、(1)ヨリモ薄イ色デアル、ソノマハリハ黄褐ノ色デカイテソレニ丹褐色デ少シクヌテアル。ソノマハリハ黄褐ノ色デ細カイ花辨ヲカイテキル。ソレガ隨分表面カラモリアガツテキル。ソノマハリモ花辨ヲヤハナガク沢山ニ力イテキルガ、コレハヤハ末ニナツタ花ノ趣デアル、(下略)

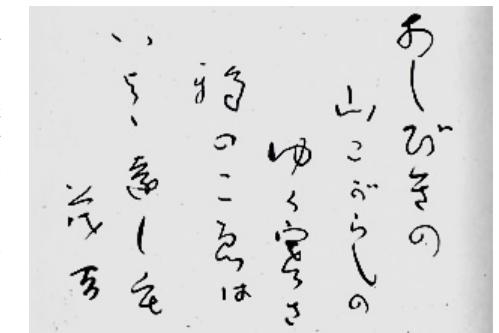
最後に、全体的印象をまとめている。

○色彩ハセンチメンタルデナク、少シモ俗向キデハナイ。床ノ黄、花瓶ノ黄等ハ一寸オモヒ及バナイ処デ後景ノ青白モ実ニ高尚ダ、オーツツノ花ビラノ写生力ハ実ニオドロクベキモノダ。花瓶ヲ小サク、低クシテ、花ノ茎ヲ短カクシタモノ、何トモ云ヘヌ重厚ノ感ジヲオコサセル。明イ処トヤハクライ処、ソノ立体的ノ関係ヲモ、花ノ心ノ色トソノマハリノ明色ノ黄ハ、何カシラ迫ツテ来ルモノガアル。(後略)

この「ひまわり」の絵は、当時ミュンヘンのノイエ・ピナコテーク(近代美術館)にあったようだが、今は英國にあるらしい。



茂吉筆「幅」大正7年～10年頃?
歌は大正4年作
ものゝ行きとどまらめやも山峡の杉の大
ぼくの寒さのひびき 茂吉



茂吉筆「幅」大正7年～10年頃?
歌は大正4年作
あしひきの山こがらしのゆく寒さ鴉の
こゑはいよいよ遠しも 茂吉

上の図版の書は、歌が作られてから4年ほどあとに書かれたものである。それまでの書風が一変している。行間が空き、流麗でリズミカルである。寂しさが伝わってくるようだ。茂吉の歌は自己と自然が一体になつたものである、書はそれを紙の上に筆と墨で再現するものである。書は歌の内容を字の形に表現するということである。(山上次郎氏)

かぜむかふ 櫻太樹の日てり葉の

青きうづだちしまし見て居りー 茂吉 『あらたま』

「僕は遠い田舎に出掛け、自然と語り合つた。・・・君はあそこの景色を知つてゐるだろう、堂々とした、静かな素晴らしい樹木がある、・・・一つ一つの樹木の中に・・・劇があると言ひたい・・・僕には、自然の嵐の劇と一生の悲しみの劇ほど印象の強いものはない。」(ゴッホのテオ宛の手紙から)

ミュンヘンから島木赤彦宛、大正13年4月14日付の手紙
1890年7月 ミュンヘンのノイエピナコティーク蔵



ファン・ゴッホ筆「オーヴェール近くの平野」
1890年7月 ミュンヘンのノイエピナコティーク蔵



ファン・ゴッホ筆「カラスのいる麦畑」
1890年7月 アムステルダム、ファン・ゴッホ国立美術館蔵



茂吉のメモ

日本で、雑誌『白樺』を中心に、明治末から大正初期にかけ、ゴッホブームが起つたが、大正10年代にはブームが下火になつていたようだ。茂吉も、ややゴッホ熱が冷めかけていたが、欧洲に来て、ドイツやフランス、オランダなどで、初めてゴッホの本物を見、その高い藝術性を再認識し、再び、茂吉の徹底したゴッホへの探求がはじまつた。

茂吉のメモに見られる、対象の部分に対するこまかい観察力、その部分を有機的に綜合して全体を把握する力。これが茂吉の歌における「実相観入」の手順と同じと思われる。

茂吉の言う「写実」「写生」とは「いのちのあらはれ」のことである。ゴッホの写実は自己の心の中の世界を表現しようとしたものである。「茂吉はゴッホの絵に自分自身を再発見した」(片野達郎『斎藤茂吉のヴァン・ゴッホ』を参考)

「ゴッホは現実の自然に隨順したので、その点に於ては驚くべき純粹で且つ素直な画家であった」(茂吉『アララギ』表紙
画解説より)

茂吉が大正13年11月2日、パリ郊外のオーヴェール・シユル・オワーズのゴッホの墓に詣でて詠んだ歌。

ヴァン・ゴッホつひの命をはりたる狭き家に来て昼の肉食す
雨のふる丘のうへには同胞の二つの墓がならびて悲し
医師ガッセの肖像も見つフランクフルトのものとの二つとあはれ
脳病みてここに起臥しし境界の彼をおもへば悲しむわれは



ファン・ゴッホ筆「カラスのいる麦畑」
1890年7月 50.5×100.5 cm
アムステルダム、ファン・ゴッホ国立美術館蔵
絶筆といわれている絵のひとつ。
「ぼくは思いきって悲しみや極度の孤独を表現してみようとした。」(1890年7月上旬の弟テオとその妻ヨー宛の手紙より)

1922年(大正11) 40歳、1月13日ウイーン着、20日、ウイーン大学神経学研究所に入る。

7月9日、森鷗外没(満60歳)

1923年(大正12) 41歳、11月、論文「植物神経中枢のホルモンによる昂奮性について」
4月、「麻痺性痴呆者の脳図」の論文が印刷され、学位論文となる。

5月、「重量感覺知見補遺」の論文が完成。

7月、ミュンヘン大学に転学。実父死去。

9月1日、関東大震災青山脳病院も被害を受け、



大正12年(1923)
ウイーンの茂吉

財政難ゆえ帰朝せよとの手紙頻繁、
平福百穂から援助を受け、滞在を延ばす。

11月、ヒトラーのミュンヘン一揆に遭遇



ウィーンのゲーテ像の前の茂吉



パリの茂吉と輝子



ベルリンの茂吉と輝子



ウィーン神経学研究所で
学ぶ茂吉(右)立っている
のはマールブルク教授

1924年（大正13）42歳、7月23日、パリで輝子と落ち合い、

共にベルギー、オランダ、ドイツ、スイス、イタリアなどなどを巡る。

10月、医学博士の学位を得て、11月30日、マルセイユから帰国の途に就く。

12月30日、船上で青山脳病院全焼の電報を受け取る。プロレタリア文学運動

1925年（大正14）43歳、1月5日、神戸着、1月7日、東京着。病院の再建に奔走。2月、長女百子誕生。

3月、「普通選挙法」「治安維持法」成立。

1926年（大正15／昭和元年）44歳、3月、島木赤彦死去（満49歳）



再建された青山脳病院本院、分院は青山の
焼け跡に建てられた小病院。

青山脳病院全焼

大正13年12月29日午前零時25分、餅つきの残火の不始末から発火し、300余名の入院患者中、20名が焼死、3時20分鎮火した。ローマ式建築の大病院は一夜にして灰燼に帰した。養父紀一は政界進出などに財産を使い果たし後で、再建は後継者の茂吉の肩にかかってきた。さらにまた、火災保険が切れていたので資金の捻出に苦しむことになった。そのほか、地元民の反対運動、地主とのトラブルなど多くの障害と戦い、5月に東京府下松沢村松原に8500坪の土地を契約、再建工事をはじめ、茂吉は金策のため連日奔走した。大正15年4月7日、病院は再建開院した。

うつそみの吾を救ひてあはれあはれ
十万円を貸すひとなきか 茂吉

うつしみの吾がなかにあるくるしみ
は白ひげとなりてあらはるるなり
茂吉

4月、青山脳病院復興。

5月、再度、『アララギ』の編集発行人となる。

1927年（昭和2）45歳、4月、青山脳病院院長になる。

5月、次男宗吉（北杜夫）誕生。

7月、芥川龍之介自殺（満35歳）（茂吉処方の睡眠薬で自殺した。）



輝子（32歳）と
宗吉（昭和2年）



芥川龍之介

1928年（昭和3）46歳、11月、養父紀一死去（満67歳）

石博茂（五島茂）との短歌論争

茂吉は、本業の精神科医、青山脳病院の婿養子として病院経営に忙殺され、研究もし、居丈高で自由奔放な妻との不和にも悩みながら、短歌や多くの隨筆の制作といった文学活動によって、茂吉は生活上の危機、苦難や悲しみや嘆きをのりこえていった。第6歌集『ともしび』の後記に、歌集名「ともしび」の意味について「艱難暗澹たる生に辛うじて『ともしび』をとぼして歩くというふやうな暗指でもあつただらうか」と述べている。

焼けあとにわれは立ちたり日は暮れて

いのりも絶えし空しさのはて 茂吉（焼けあと、大正14年）

寒水に幾千といふ鯉の子の

むなしき空にくれなぬに立ちのぼる

ひそむを見つ心なごまむ 霜（霜、昭和元年）

ほのほ
火炎のごとくわれ生きむとす



第6歌集『ともしび』表紙
大正14年1月（41歳）
から昭和3年（46歳）
までの歌912首を收め
ている。昭和25年1月
30日に刊行された。

かすかなるむしの遊も見ゆるなり　日に照らされし擬宝珠の葉に　茂吉

うすかすらむしの遊も見ゆるなり
日に照らされし擬宝珠の葉に　茂吉

茂吉筆「短冊」
6×36 cm
「ともしび」収録

- 1929年（昭和4）47歳、4月、『短歌写生の説』刊行
1930年（昭和5）48歳、3月、太田水穂と「病雁論争」、
土屋文明、『アララギ』の編集発行人に。

1931年（昭和6）49歳、8月、寧応和尚没・満州事変

1932年（昭和7）50歳、『源実朝』『近世歌人評伝』執筆

1933年（昭和8）51歳、『萬葉短歌声調論』を『萬葉集講座』に発表。『柿本人麿研究』執筆開始。

『正岡子規』『明治大正和歌史』執筆

歌集『連山』
斎藤茂吉
第8表紙 5年10月11日刊行。
昭和5年5月11日から25年間で収めます。
昭和4年9月首を始め、昭和5年6月30日刊行。

1934年（昭和9）52歳、5月、中村憲吉没（46歳）9月、子規33回忌歌会で永井ふさ子と出会う。以後、茂吉は毎日のようにふさ子に手紙を書いた。11月、『柿本人麿、総論篇』刊行。この頃、歌の弟子永井ふさ子（24歳）と親密な関係になる。



茂吉(52歳)と子供たち(昭和9)
左より百子・茂太・茂吉・昌子・宗吉

夫婦関係は幸せではなかつた。心の通わぬ夫婦であつた、しばしば衝突し、かんしゃく持ちで、すぐに手を擧げる茂吉の家庭内暴力も度々あつたらしい。性格の不一致などが原因と思われるが、輝子は茂吉に「おきあと」、「茂吉は本当に純粋な人」「茂吉は神様みたいな人だつた」とテレビなどで語つているが、本心は分からぬ。

輝子は天真爛漫で、自由奔放、マスコミから「猛女」と呼ばれた。茂吉没後7年目、64歳の輝子は海外にはばたく。89歳で亡くなるまでに、海外渡航数97回、世界108ヶ国を訪れている。79歳で南極、80歳でエベレスト山麓、81歳でエジプト、83歳でアラビア半島、フイジー諸島、85歳でジンバブエなどを訪れ、合計で地球36周分の旅をした彼女は、類まれなる強い女性であった。(輝子の事は『猛女とよばれた淑女』斎藤由香著に詳しい)

1934年（昭和9）52歳、5月、中村憲吉没（46歳）9月、子規33回忌歌会で永井ふさ子と出会う。以後、茂吉は毎日のようにふさ子に手紙を書いた。11月、『柿本人麿、総論篇』刊行。この

頃、歌の弟子永井ふさ子（24歳）と親密な関係になる。

永井ふさ子は、子規のふた従兄弟で、県立松山高女を卒業後上京、姉の家に寄宿し、アララギに入会し短歌の修業に励んでいた。茂吉からの手紙は150通ほどあつたらしいが、一部焼却され、130通余りが残っている。ふさ子は結婚を期待したが、茂吉にはその気はない、茂吉の苦しみを慮つて、叶わぬ恋を諦めるため、昭和12年春、ふさ子は両親の薦める縁談に一旦は合意するが、茂吉を忘れきれないふさ子は縁談を破約し、病気になつてしまふ。この真相を知つたふさ子の父は、心労のため、翌年亡くなつてしまつた。縁談の破棄以後、ふさ子と茂吉はどうなつたのか、「もはや私にとって他の人の感情を受けすることは苦痛でしかなかつた。婚約解消を決意すると同時に、先生との恋愛をつづけることも自分にゆるせなかつた」と、いうことらしい。



20代の永井ふさ子

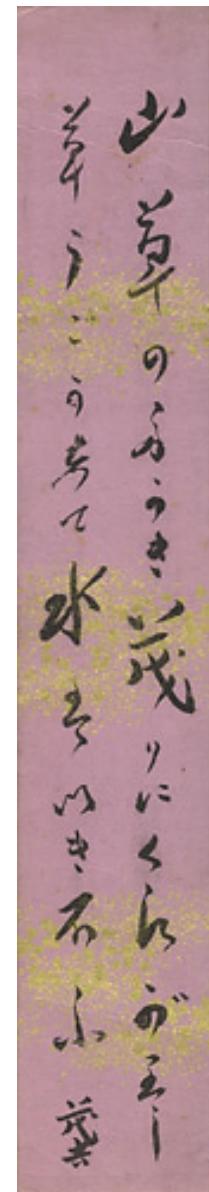
永井ふさ子は、子規のふた従兄弟で、県立松山高女を卒業後上京、姉の家に寄宿し、アララギに入会し短歌の修業に励んでいた。茂吉からの手紙は150通ほどあつたらしいが、一部焼却され、130通余りが残っている。ふさ子は結婚を期待したが、茂吉にはその気はない、茂吉の苦しみを慮つて、叶わぬ恋を諦めるため、昭和12年春、ふさ子は両親の薦める縁談に一旦は合意するが、茂吉を忘れきれないふさ子は縁談を破約し、病気になつてしまふ。この真相を知つたふさ子の父は、心労のため、翌年亡くなつてしまつた。縁談の破棄以後、ふさ子と茂吉はどうなつたのか、「もはや私にとって他の人の感情を受けすることは苦痛でしかなかつた。婚約解消を決意すると同時に、先生との恋愛をつづけることも自分にゆるせなかつた」と、いうことらしい。

ふさ子は83歳で亡くなるまで、独身を通した。松山の長建寺にふさ子の一人墓がある。茂吉没後10年の1963年、ふさ子は雑誌に茂吉からの手紙と手記を発表し、衝撃が広がつた。

1981年刊、永井ふさ子著『斎藤茂吉・愛の手紙によせて』がある。

光放つ神に守られもろともにはれひとつの息を息づく（茂吉とふさ子の合作）
狼になりてねたましき咽笛を囁み切らむとき心和まむ（茂吉とふさ子の合作）

山草のたかき茂りにくらがりし草うごかして水はいきほふ 茂吉
やまぐる
しげ



多加波良企光
之如久宇具比
須々武羅蟹理奈
人若多能志加
理計剝 茂吉

たかはら うぐひす
茂吉筆「高原に光のごとく 鶯のむらが
り鳴くはたのしかりけり 茂吉」
歌集「たかはら」所収

昭和8年から14年にかけ作られた、「白桃」「曉紅」「寒雲」は茂吉文学の頂点と言われている。茂吉52歳から58歳までの三千余首である。これらが作られた時期は、友の死や妻のスキヤンダルなど実生活上の悲嘆がつづいた。そのような孤独のなかで、歌の弟子永井ふさ子に出会い、暫時、茂吉は恋愛歌人へと転進したようだが、彼は女体にしか興味がなかったようである。これでは恋愛歌人とはいえないだろう。



第10歌集『白桃』表紙
昭和8年から昭和9年までの歌1017首を収めている。昭和17年2月25日刊行。

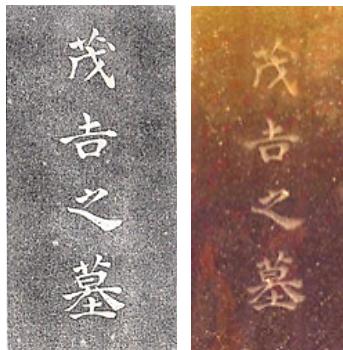
第11歌集『曉紅』表紙
昭和10年から昭和11年までの歌968首を収めている。昭和15年6月30日刊行。



第12歌集『寒雲』表紙
昭和12年から昭和14年10月までの歌1115首を収めている。昭和15年3月1日刊行。



第13歌集『のぼり路』表紙
昭和14年10月から昭和15年までの歌734首を収めている。昭和18年11月20日刊行。



1938年（昭和13）56歳、4月、国家総動員法制定される。

11月、『万葉秀歌』上下二巻を刊行。『柿本人麿』により透谷賞受賞。

この頃より、戦争詠が多くなってくる。ふさ子との恋愛も冷めてくる。茂吉の関心は、恋愛から国家や戦争へと変化し、恋愛歌人から、愛国歌人へと転身していく。ふさ子は生涯茂吉を慕い続けたのであろうか。歌集『寒雲』のなかで戦争歌人への転身が見られる。愛国心にもえた戦争歌を、歌集に編むことを茂吉は予定していたが、戦争が終わってしまい実現しなかった。茂吉は歌壇の先頭に立つて戦争を賛美した。

1939年（昭和14）57歳、2月、『柿本人麿』評釈篇之下』刊行。

9月、第一次世界大戦勃発。10月、高千穂峰に登る。

1940年（昭和15）58歳、3月、歌集『寒雲』刊行。『不斷経』刊行。

5月、茂吉の『柿本人麿』帝国学士院賞受賞。

6月、『高千穂峰』刊行。歌集『曉紅』刊行。



茂吉は、人麿の歌を既成短歌の最高峰だと仰ぎ、人麿研究に没頭した。昭和9年から15年にかけて『柿本人麿』全5巻が岩波書店から刊行された。長谷川如是閑は「御用詩人柿本人麿」で人麿を徹底的に貶めた。



「愛國百人一首」昭和 17 年 12 月 8 日、大東亜戦争開始一周年に発行

認定 情報局、協力 毎日新聞社、選定 日本文学後援 陸軍省、海軍省、文部省、京大政翼賛会、日本放送協会、京都 山内任天堂謹製

爱国百人一首選定委員は、佐々木信綱、尾上柴舟、太田水穂、窪田空穂、斎藤瀬、斎藤茂吉、川田順、吉植庄亮、釈道空、土屋文明、松村英一。(北原白秋)

万葉時代から幕末までの、皇室への崇敬や国土愛、家族愛などを詠んだ「愛國」の和歌が選ばれている。選ばれた歌は、名歌ばかりで、本来、軍国主義とは何ら関係ない歌であった。しかし、これらの和歌はナショナリズムと結びつけられ、侵略戦争を聖戦と思わせるなど、戦争する心を準備した。

茂吉は、戦後、「戦犯歌人」と蔑称され、非難が集中するほど国策に超協力的な歌人であった。彼は歌作を通して、戦争遂行に積極的に加担した。彼が戦時に制作した戦争礼賛、国威発揚歌は1800首以上に及び、そのほとんどが新聞や雑誌やラジオで発表され、軍国主義を煽るのに役立った。しかし、茂吉本人は、戦争協力したことへの反省はないようである。茂吉は、昭和21年4月、弟子に以下のように話したという、「俺を戦争協力者は一体どういうことだ。俺ばかりということはない。歌人のほとんどが皆そうじゃないか。国が戦争をすれば、誰でも勝たせたいと願うのは当然だ。國民にとつてそれがどこが悪い」「俺を戦争協力者に舉げるなんて、奴らは共産党が時局便乗の奴らに決まっている」と。

茂吉の戦争歌は、歌集「石泉」「白桃」「曉紅」「寒雲」「のぼり路」「霜」「小園」と「短歌拾遺」などに收められている。そのいくつかを見てみよう。

あな清し敵前渡河の写真みれば皆死を決して犠鼻禪ひとつ（「寒雲」） 上海戦の部隊おもへば炎だつ心となりて今夜ねむれず（「寒雲」） 勝ちきほふあたらしき代のときのまも皇御民はおほらかにせじ（「とどろき」）

あたらしき年のはじめに誓はなむこの勝戦つらぬかむとぞ（「くるがね」） あやまれる蒋介石の面前に武漢おちて平和建立第一歩 漢口は陥りにけり穢れたる罪のほろぶる砲の火のなか・・・・・。

茂吉はまた、「たたかひの歌をつくりて疲れたるわれの一時何か空しき」（「独語」）とか、戦争歌を「死骸の如き歌累々とよこたはるいたしかたなく作れるものぞ」などと時に読んでいるようだが、何か嘘偽しく卑怯である。

1941年（昭和16）59歳、12月8日、真珠湾攻撃、太平洋戦争開始。

1942年（昭和17）60歳、2月、歌集『白桃』刊行。

3月、「文学の師・医学の師」を発表。
8月、『伊藤左千夫』刊行。

1943年（昭和18）61歳、11月、『源実朝』、『のぼり路』刊行。

1945年（昭和20）63歳、3月、12年間別居していた妻輝子を青山の自宅に帰す。

4月、単身、郷里金瓶に疎開する。

5月25日、空襲で青山自宅、病院が全焼。

6月、妻輝子、次女昌子、金瓶に来て同居。

8月、広島、長崎に原爆投下される。

第二次世界大戦終結

1946年（昭和21）64歳、1月30日、山形県大石田に移住。

昭和21年頃、最上川の河原の茂吉

輝子は上京して長男茂太と同居。

3月、左湿性肋膜炎に罹り

5月上旬まで臥床療養。

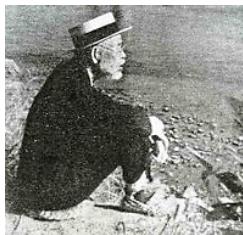
4月、選集『浅流』刊行。8月、歌集『つゆじも』刊行。

10月、昭和22年度御歌会始選者となる。

1947年（昭和22）65歳、4月、『短歌一家言』『作歌実語録』



第16歌集『白き山』
昭和21年から昭和22年までの歌
850首を収める。
昭和24年8月20日刊行。



昭和21年頃、
大石田を流れる最上川の河原の茂吉

『万葉の歌境』刊行。

7月、『童牛漫語』刊行。

8月、歌集『遠遊』刊行。上山で天皇に拝謁。

11月、東京の世田谷区代田に移住。

この年から1951年まで歌会始選者

1948年（昭和23）66歳、1月、養母ひさ死去。朝日新聞歌壇の選者に。

4月、歌集『遍歴』刊行。

青山脳病院院長を引退。

1949年（昭和24）67歳、4月、歌集『小園』刊行。

5月、日本芸術院会員となり宮中で倍食。

8月、歌集『白き山』刊行。

1950年（昭和25）68歳、1月、歌集『ともしび』刊行。

5月、第一回読売文学賞詩歌賞受賞。

6月、歌集『たかはら』刊行。

10月、『明治大正短歌史』刊行。

次兄守谷富太郎死去。左側不全麻痺で臥床。

1951年（昭和26）69歳、2月、心臓喘息の発作と呼吸困難続く。

3月、『続明治大正短歌史』刊行。

6月、歌集『石泉』刊行。

11月3日、文化勲章受章。

12月、歌集『霜』刊行。

1952年（昭和27）70歳、5月、『斎藤茂吉全集』（岩波書店）第一回配本開始。

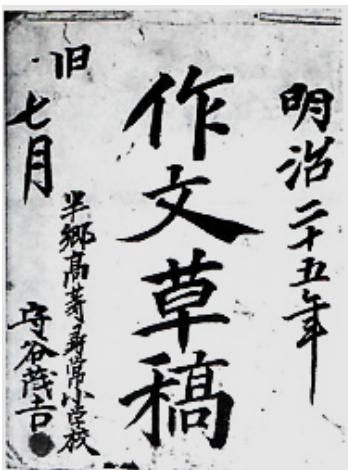
1953年（昭和28）71歳、2月25日、心臓喘息で死去。（満70歳9月）

茂吉の書画

茂吉の実父も兄弟たちも能筆ぞろいであった、中でも茂吉は、幼少の頃から書が特に上手く、父は茂吉に本気で、勉強して書家にならないかと勧めたくらいであったという。茂吉は、9歳頃から、佐原隆応和尚について書を学んだ。隆応和尚は、若いころ（明治初年）、流行していた巻菱湖流を学び、ついで、鳴鶴流に移った。茂吉も鳴鶴流の手本を小学校で習つた、隆応和尚は、26歳の時（明治21年）、たまたま中林梧竹の拓本を見た。その後、和尚は生涯、梧竹の崇拜者となり、梧竹の書法を村中に広めた。明治25年、梧竹が宝泉寺に来て、七日間滞在した折、和尚の依頼で梧竹は「片仮名帳」を書き残した。それを10歳の茂吉が双鉤填墨した、と後年、本人が言つているものが残つているが、おそらく長兄が写したものだろう。



梧竹の習字手本を茂吉の長兄が写して茂吉に与えた手本と思われる。
梧竹は鳴鶴の書を臨書したようである。



茂吉筆「作文草稿」表紙 10歳の書



第17歌集『つきかけ』
昭和23年から昭和27年までの歌 1008首を収める。茂吉没後の昭和29年2月25日刊行された。

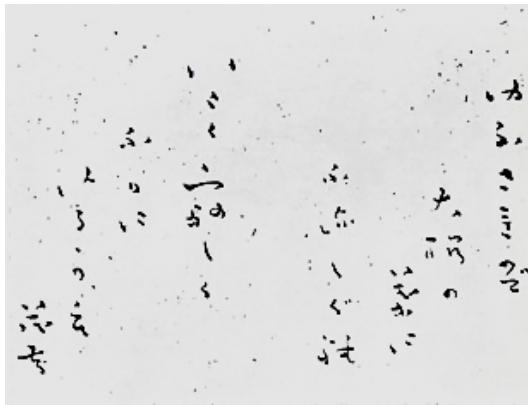


昭和26年頃の茂吉

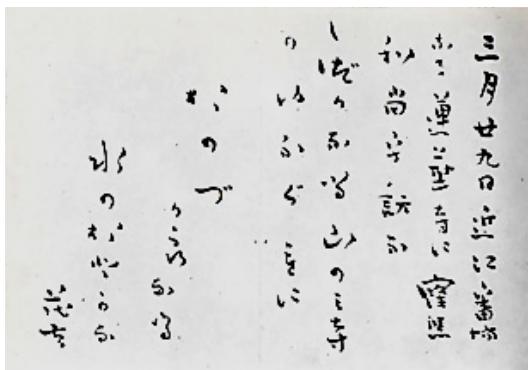


昭和25年、孫と茂吉

書道もろもろ塾 (2015.12.20)

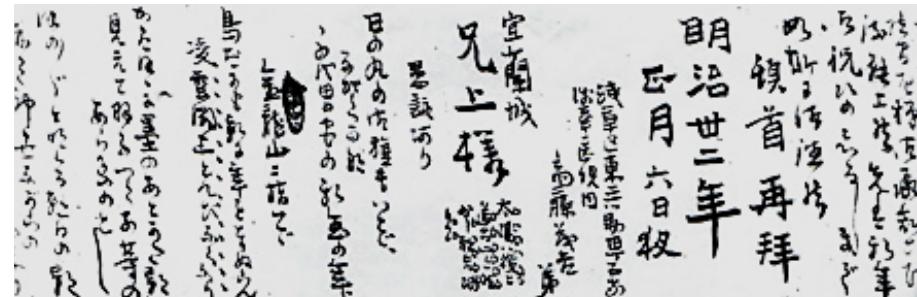


茂吉筆「帖」大正10年（39歳）頃、
ゆふされば大根の葉にふるしぐれいたく寂し
くふりにけるかも 茂吉



茂吉筆「帖」大正10年（39歳）頃
「三月廿九日近江番場なる蓮花寺に蘆庵和尚
平訪ふ」しづかなる山のミ寺のゆふぐ連に於の
づか良なる水の於とか奈 茂吉

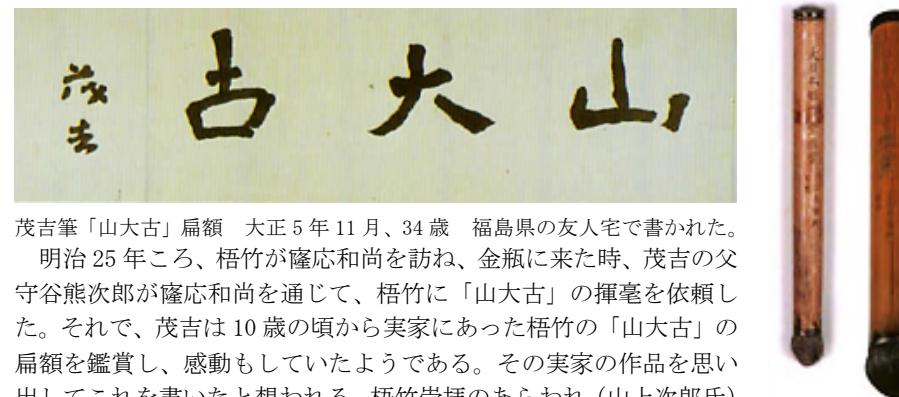
茂吉は、大正 10 年、長崎を引き上げる途中
近江にいた龍應和尚を訪ねた。その時詠んだ歌
と書である。寂寥幽玄の風韻の書である。



茂吉筆「次兄守谷富太郎宛書簡」1899年（明治32年1月6日付）16歳の書
歌がかれている



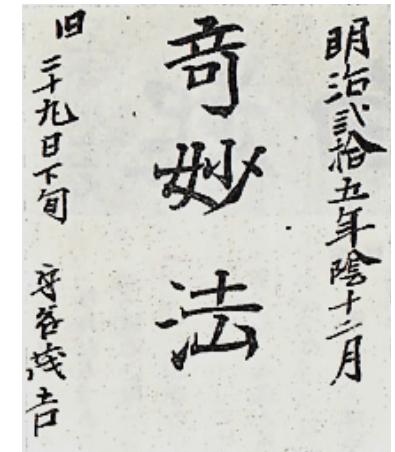
中林梧竹筆「恬筆以前」1912年(明治45年/大正元年)86歳超短鋒筆使用
くろいん むづか 筆「恬」は筆を改良した秦の蒙恬(前3世紀の人のこと)、蒙恬より昔の筆だという意味。



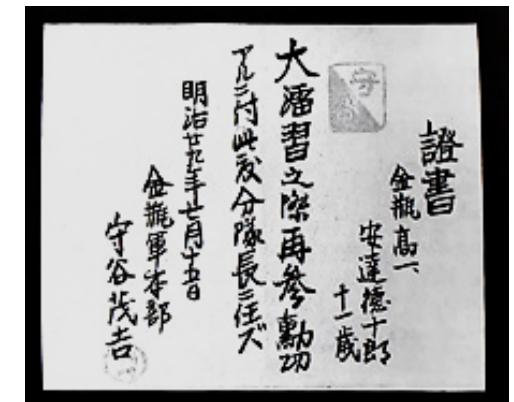
茂吉筆「山大古」扁額 大正5年11月、34歳 福島県の友人宅で書かれた。

明治25年ころ、梧竹が蘆庵和尚を訪ね、金瓶に来た時、茂吉の父守谷熊次郎が蘆庵和尚を通じて、梧竹に「山大古」の揮毫を依頼した。それで、茂吉は10歳の頃から実家にあった梧竹の「山大古」の扁額を鑑賞し、感動もしていたようである。その実家の作品を思い出してこれを書いたと想われる。梧竹崇拜のあらわれ（山上次郎氏）

茂吉は小学校で習った鳴鶴の手本や中学校で習った西川春洞の影響も受けているようである。



茂吉筆「奇妙法」10歳の書
六朝体で書かれている



茂吉筆「証書」冗談で書いたもの 14歳の書

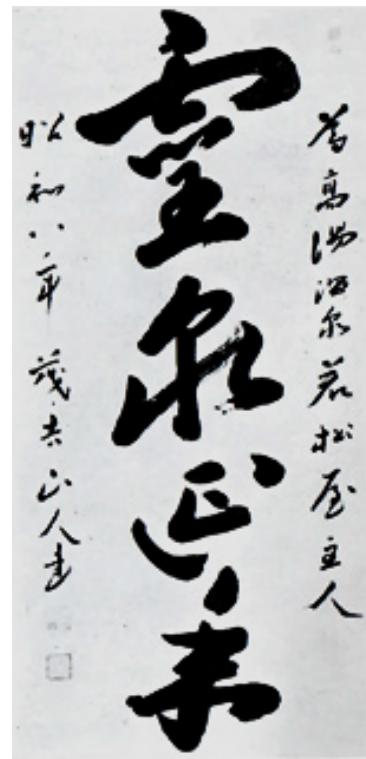
少年茂吉の書の師は、
隆応和尚と梧竹の書であ
った。彼等から北派の書
を習つた。梧竹は60歳前
後に六朝風の書をかいて
いた。梧竹が金瓶にきた
のは65歳ころである。
和尚は「一字は形などは
どうだつてよい、きたな
い字を書いてもよい。た
だ芯のある字を書け」とよ
く教えた。芯のある字と
いうことは、子供にもな
んとなく会得出来たナ。」
（「茂吉秘話」）



茂吉筆「藏王山歌碑」幅
昭和9年（1934）8月 52歳

茂吉の書にはめずらしく、右上がりの強い書である。逆境に抵抗する気持ちが表れたものか。書かないではいられないから書いた書である。そこが、書家梧竹との違いである。

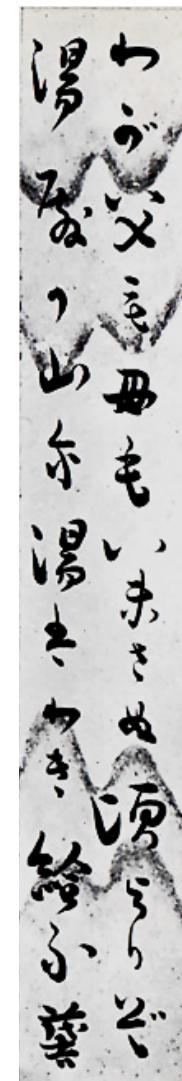
陸奥をふたわけさまに／聳えたまぶ藏王の山／の雲の中にたつ 茂吉



茂吉筆「靈泉延年」幅 昭和8年（1933）
山形市外藏王温泉の若松屋蔵

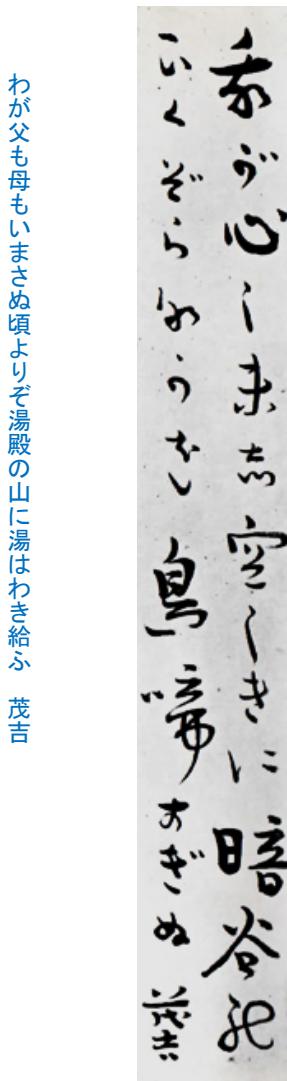
茂吉がとくに、中林梧竹に傾倒したのは昭和4、5年ころからという。東京の烏山にある梧竹堂から、名品を借り受けて学んでいる。梧竹の「恬筆以前」を借りて臨書したのは昭和8年（1933）、茂吉51歳の時という。

臨書した日に、上の「靈泉延年」を揮毫したようである。梧竹にそっくりである。この頃から茂吉の書は梧竹風になってゆく。左右の細字は梧竹風ではない。



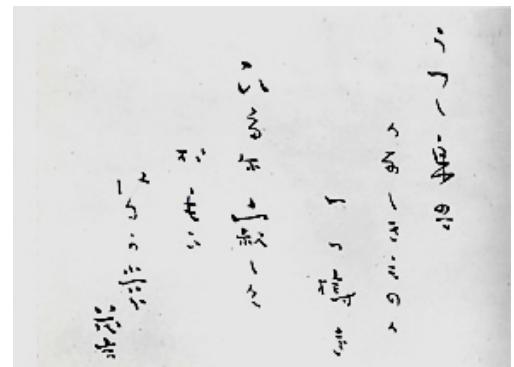
茂吉筆「短冊」
昭和6年頃

起筆の大きい書風は昭和4年頃に消滅し、続いて、梧竹の連绵草の影響を受けた書が現れるが、昭和5年から昭和9年にかけて一字一字を切り離した書風に変わっていった。

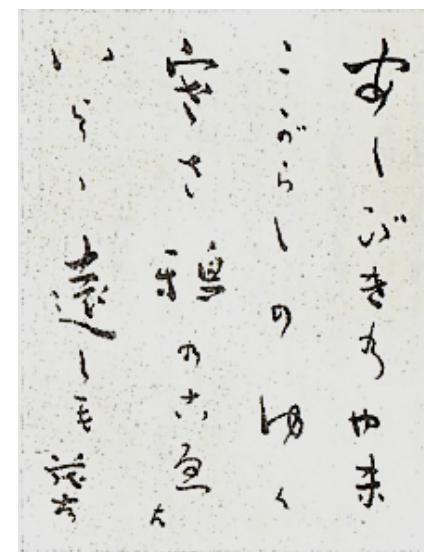


茂吉筆「短冊」
昭和6年頃

我が心しまし空しきに暗谷のひくぞらなかを鳥啼すぎぬ 茂吉



茂吉筆「幅」大正14年（43歳）頃の書
うつし身はかなしきものか一つ樹をひたに
寂しくおもひけるかも 茂吉



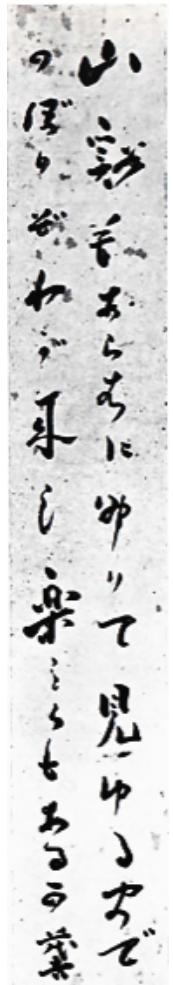
茂吉筆 大正14年（43歳）頃の書

あしひきのやまこがらしのゆく寒さ鴨のこ
ゑはいよいよ遠しも 茂吉

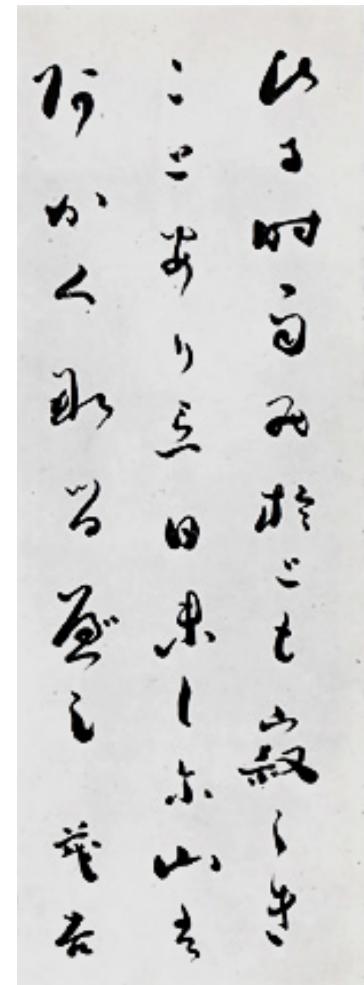
起筆が大きく深く入筆される書は、大正末期から昭和初期にかけてだけみられる特徴である。これは誰の影響もない、茂吉独自の書である。この頃、茂吉は「空間の筆意」について意識している。

山谿もあらはになりて見ゆるまでのぼりぞわが来し楽しくもあるか

茂吉



ひる時雨のおとも寂しきことありて日ましに山はあかくなるべし 茂吉



茂吉筆 昭和 20 年 10 月 28 日の書



たまきはる命生きむとはしきやしこの畠つものも食はざらめやも 茂吉

たまきはる命いりむこ
けしませゑこみ柳つね
も食はざらめやも

茂吉

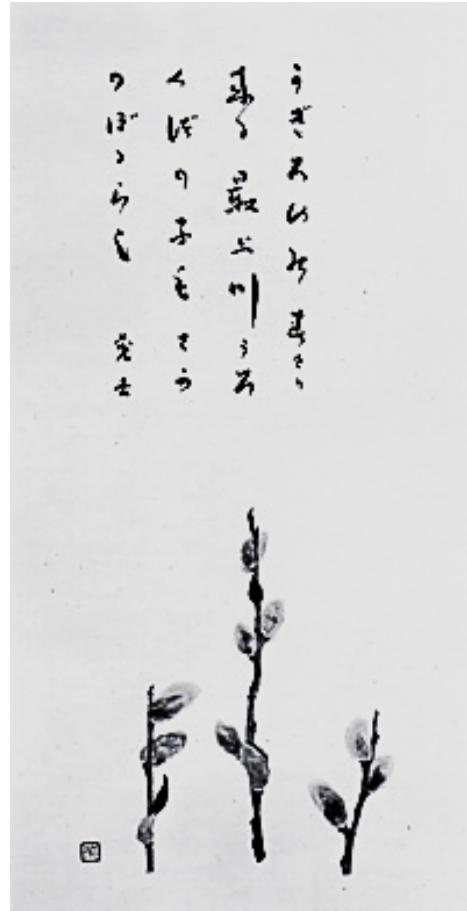
茂吉筆「南瓜」昭和 21 年 10 月頃?

茂吉は、敗戦の年から翌年にかけ大石田町に住み、本格的に絵を描き始めた。

茂吉の絵は、誰の真似でもなく、自然に向かいあって一人で描きあげたものである。

正岡子規の絵と共通するものがある。

茂吉の歌と同じく、觀察が細かく、感情が込められている。『斎藤茂吉全画集』(中央公論美術出版)には85枚の絵が収められている。茂吉は、風景の絵も描いているが、この画集は、花や野菜の絵を載せている。



茂吉筆「猫柳」昭和 22 年ころか?

為茂吉生 大聖文殊菩薩 梧竹居士揮書

大聖文殊菩薩

梧竹居士揮書

中林梧竹筆「幅」明治 29 年 9 月

龜應和尚が梧竹に依頼して、上京した茂吉のために揮毫してもらった書。茂吉は、死の 7 日前に、この書を床の間に掛けて、亡くなつたという。「大聖文殊菩薩中林梧竹揮書少年茂吉十五歳のため」(昭和 26 年、茂吉作)

茂吉筆「短冊」
昭和 10 年～15
年頃も書

書きぶりがいい
ぶどう退して
たどりて忘
る。梧竹を
されたためか。